

城を歩く会*7月定例会(講座)

平成20-7-9 山岸弘明

天下普請石垣 —— 織豊から徳川時代へ、その変遷と見どころ



織田信長

豊臣秀吉

徳川家康

丹羽長秀

藤堂高虎

織田信長=丹羽長秀から徳川家康=藤堂高虎へ、引き継がれた「天下普請」ノウハウ

「天下普請」——築城コンクールがもたらした石垣の技術革新

- ① 「天下普請」とは、天下人が諸大名に命じた築城工事をいう。
- ② 「天下普請」は天正4年、織田信長が丹羽長秀(後出)に縄張りを命じた安土城に始まる。
 - (1)石積みの城が作られるようになるのは16世紀中ごろとされる。戦国期の石垣はせいぜい2~3m規模で、安土城は5m以上の高石垣を連ねた。石材の切り出しや輸送、石積みなど規模拡大にともなう技術開発がはじまる。
- ③ 「天下布武」を後継した豊臣秀吉が大坂城、聚落第、伏見城など7か城を構築
 - (1)山城から平城へ、守る城から政治の城、権威の城へ。金色さんぜんの大坂城が出現。平地進出でより堅固な石垣構築が求められることになる。
 - (2)一方で戦いのための城も=小田原攻略のための石垣山一夜城、朝鮮出兵のための名護屋城。韓国に残る倭城(わじょう)も天下普請といえなくもない。
 - (3)石垣の発展期、技術開発が進んだ。秀吉の天下統一とともに石積み城はまたたくまに全国に広がった。
- ④ 豊臣家を滅亡させた徳川家康は江戸城、大坂城、二条城、駿府城などを次々と築いた。
 - (1)家康の「天下普請」は始め豊臣包囲網で、滅亡後直轄城や一門、実子に広げた。
 - (2)関が原合戦後、朝鮮出兵に続く家康の「天下普請」で石垣技術が一気に向上する。
 - (3)有力諸大名は「天下普請」に備え、東伊豆、小豆島などに「石切り丁場」を開設、石材は「あら割り石」から「切り石」へ、石積みも「野づら積み」「打ち込みハギ」から「切り込みハギ」と変わり、コーナー部分の「算木積み」が確立する。石垣は石切り、輸送、石積みの「マニュアル化」が進み、爛熟期を迎える。
 - (4)縄張りは城作りの名人・藤堂高虎が担当、城郭技術の集大成は江戸城だが、石垣は大坂城が1番といえる。
- ⑤ 「天下普請」の目的=
 - (1)徳川一門居城の充実、幕府基盤の確立
 - (2)諸大名に金を使わせて戦力を低下させる(福島正則のぼやき節が聞こえる)
- ⑥ 天下普請の効果
 - (1)諸大名が技術を競った築城コンクール=盗み合い、競い合いによる技術向上
 - (2)築城技術の発展と普及=石垣技術の急速な向上で修復と築城ラッシュに
- ⑦ 「元和えん武」(武家諸法度、1国1城令)による終焉
 - (1)えん武は武器をおさめて用いないこと。元和元年豊臣家を滅亡させた家康は「太平」を宣



織田信長の安土城



徳川大坂城



聚楽第↑



築城図↓

江戸城↑



- ① 織田信長の天下普請
 - (1)安土城(近江) 天正4年(1567) ○
 - ② 豊臣秀吉の天下普請
 - (1)大坂城(摂津) 天正12年(1584)
 - (2)聚落第(京都) " 14年(1586) ◎
 - (3)石垣山城(相模) " 18年(1590) ○
 - (4)名護屋城(肥前) 文禄元年(1592)
 - (5)伏見城(山城) 文禄3年(1594)
 - (6)伏見城② 慶長元年(1596)
 - (7)大坂城② " 3年(1598)
 - ③ 徳川家康(秀忠、家光)の天下普請
 - (1)膳所城(近江) ☆慶長6年(1601)
 - (2)伏見城(山城) " 6年(1601)
 - (3)加納城(美濃) " 6年(1601)
 - (4)二条城(京都) " 7年(1602)
 - (5)江戸城(江戸) ☆" 9年(1604) ○
 - (6)伏見城② " 9年(1604)
 - (7)彦根城(近江) " 9年(1604) ○
 - (8)長浜城(") " 11年(1606) ○
 - (9)伏見城③ " 11年(1606)
 - (10)駿府城(駿河) ☆慶長11年(1606) ○
 - (11)江戸城② ☆" 12年(1607) ○
 - (12)駿府城② ☆" 13年(1608) ○
 - (13)名古屋城(尾張) ☆" 14年(1609) ○
 - (14)亀山城(丹波) ☆" 14年(1609)
 - (15)篠山城(") ☆" 14年(1609) ◎
 - (16)高田城(越後) " 19年(1614) ○
 - (17)大坂城(摂津) ☆元和6年(1620)
 - (18)二条城② 寛永元年(1624) ◎
- 注意=天下普請の範囲に諸説があります
②、③=再築、☆=藤堂高虎縄張り、○=過去の見学箇所、◎=秋の見学予定

秀吉が朝鮮出兵和平交渉に備えた伏見城「天下普請」で大地震発生！石垣崩壊が「扇の勾配(ソリ)」と「算木組み」を生んだ

「あら割り石」から「切り石」、「野づら」「打ち込み」から「切り込みハギ」へ

天下普請石垣 —— 織豊から徳川時代へ、その変遷と見どころ

1) 「天下布武」を託した山城の五重天守閣 —— 築城6年、信長本能寺に散る

- ① 天正4年、織田信長が「天下布武」の象徴として築城、しかし、志半ばで明智光秀の「本能寺の変」で倒れた天正10年焼失。2男信雄が明智残党掃討のため城下に放火、またたくまに延焼した。
 - (1)日本の首府としての城下造り
 - (2)焼け残った建物は天正13年秀吉の八幡山城築城で城下町ごと移築、後さらに一部が天津、膳所を経由、彦根城へ移されたという。
- ② 琵琶湖に突き出した標高100mほどの安土山に立地、本丸郭内と山麓の郭外曲輪からなる。
 - (1)本丸には天主(天守閣)、本丸御殿、2の丸(西の丸)、3の丸(東の丸)があった。
 - (2)大手道に沿って秀吉、家康、前田利家などの重臣邸を配した。
- ③ 天主は7年5月完成、5重7階、俗に「わが国最初天守閣?」とする。
 - (1)3階入母屋造り殿主の上に2階の望楼を載せた初期望楼型天守で、不等辺七角形平面に架けられた史上もっとも複雑な屋根構造の建造物といえる。金箔瓦などが出土した。
- ④ 虎口は3か所、大手道は天皇の御幸を想定、百々(どど)橋口は通常の登城道で途中に総見寺を置いた。からめ手口は琵琶湖に接した谷路で船入り、物資の搬入口でもあった。

2) 安土城の石垣は個人技 —— 「穴太衆」も「穴太積み」もまだない

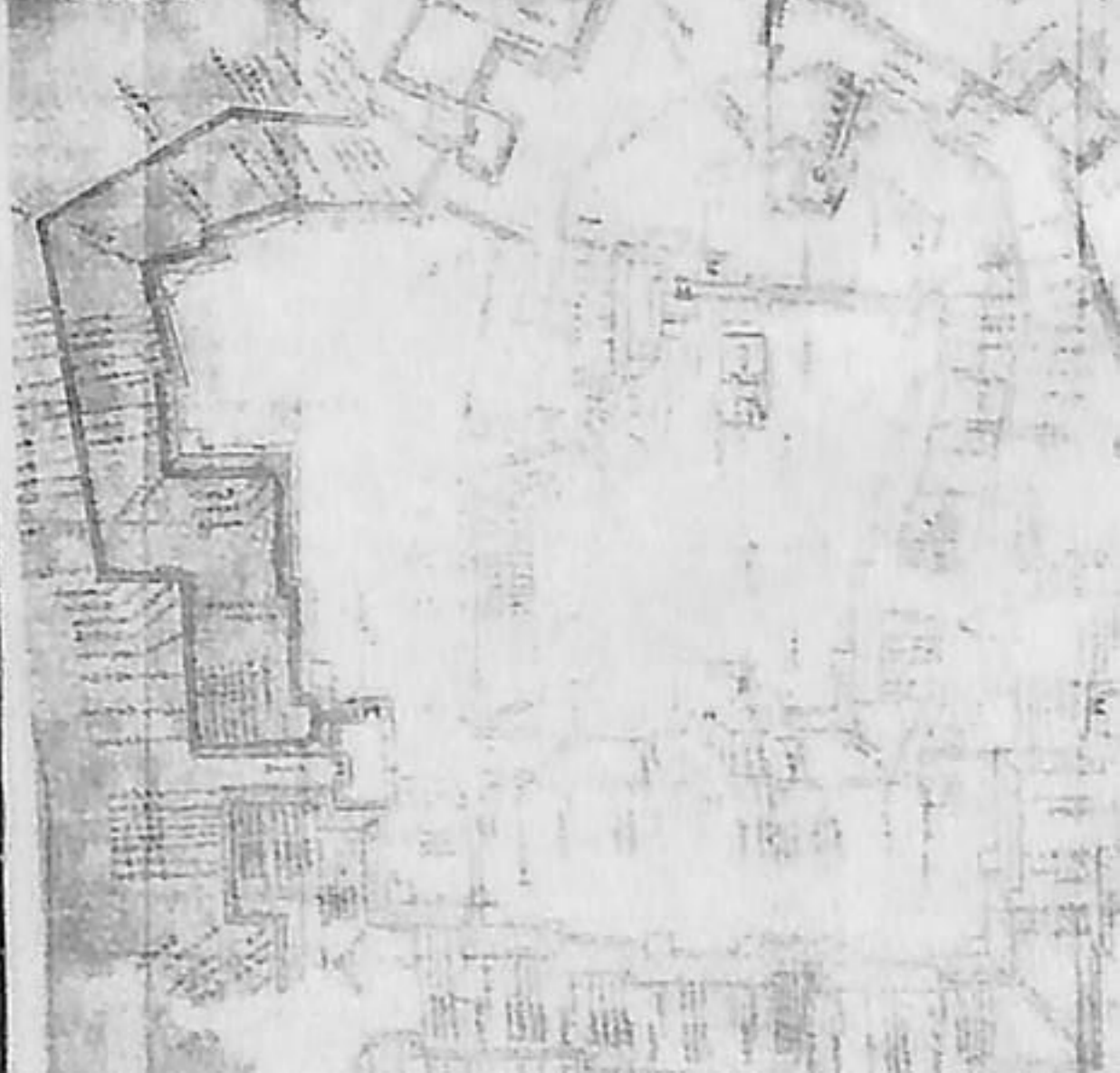
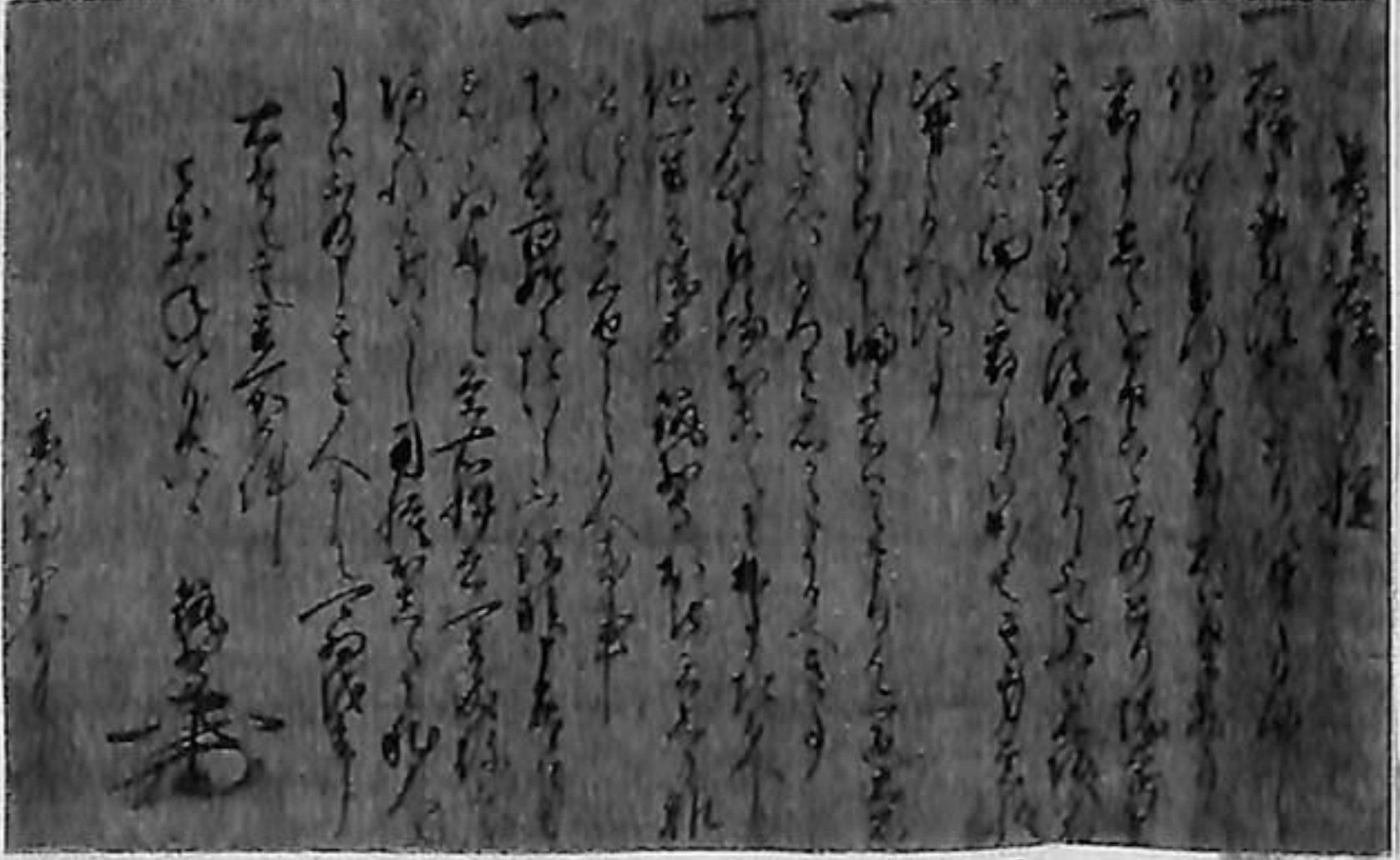
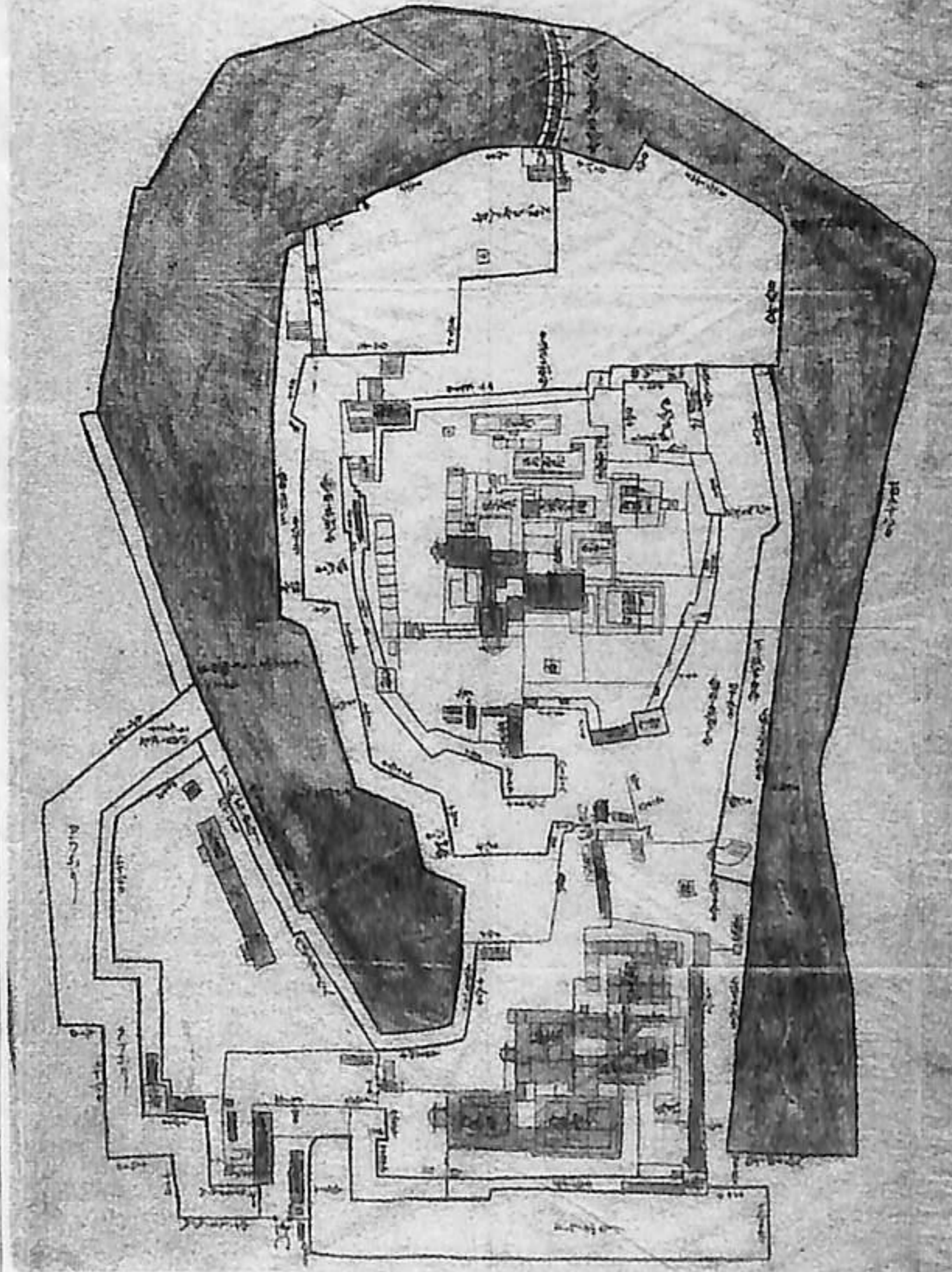
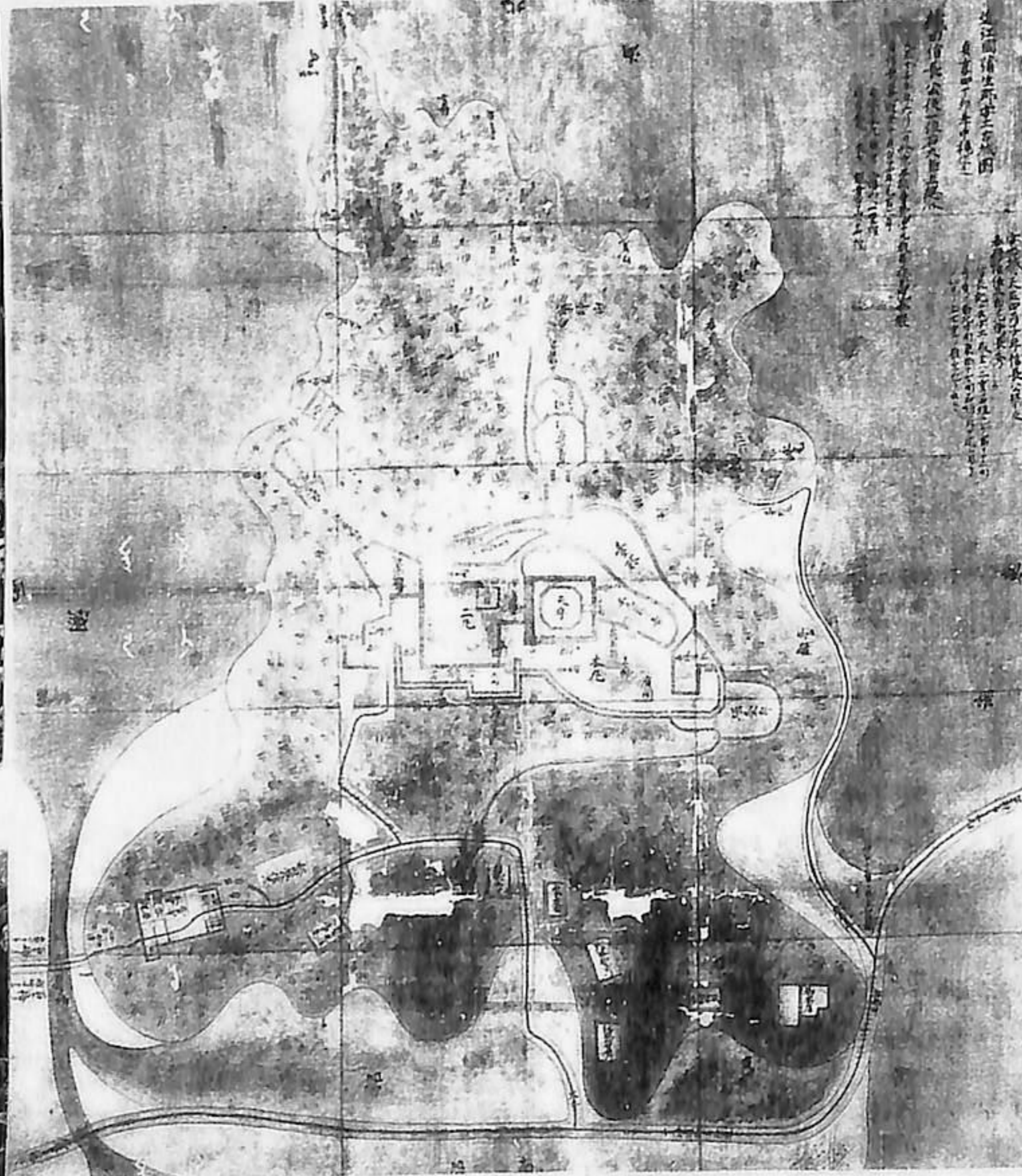
- ① 『信長公記巻9』=天正4年、正月中旬より江州安土山御普請、惟住五郎左衛門(丹羽長秀=佐和山城主)に仰せ付けられ、2月23日安土にて信長御座移らる。
 - (1)4月1日より当山大石をもって御構え方に石垣を築かれる。またその内に天主を仰せ付けらるべきの旨にて、尾濃勢三越若州、畿内の諸侍、京都、奈良、堺の大工、諸職人等召し寄せられる。
 - (2)観音寺山、長命寺山、長光寺山、伊場山所々の大石を引き下ろし、千、二千、三千ずつにて安土山へ上げられ候。
 - (3)石奉行、西尾小左衛門、吉田平内、小沢六郎三郎、大西蛇石という名石にて、勝たる大石に候間、一切に御山へ上げえざる候間、羽柴筑前(秀吉)、滝川左近(一益)、惟住五郎左衛門三人、助勢一万余の人数をもって、夜日三日に上せられ候。昼夜、山も動くばかりに候。

② 現状は「復元」ではない —— 「穴太衆」は新井白石の創作?

- (1)安土城以前は城に石垣が積まれることはまれ、当時の石垣技術は村や有力寺院にあった。
 - (2)信長は近畿圏内のあらゆる村々の石垣積み経験者を徴収、安土に集結させた。
 - (3)安土の石積み主力は岩倉で聚落第以降穴太に、「穴太衆」の呼び名は江戸中期新井白石の「公儀穴太方びいき」による。職人たちはこぞって穴太出身をいい張り、石積み職人の代名詞に。
 - (4)安土城の石積み方法はそれぞれ異なっている=担当チームの我流?
 - (5)今日の石垣は昭和40年代前半の再築、詳細な学術調査はなく「復元とはいえない」。
- ### ③ しいて盛時の石垣を推定、考察すれば
- (1)わが国最初の本格的城郭石垣工事(高石垣)、石積み方法が統一されていない。
 - (2)石材は輸送サイズに「あら割り」して使用。矢穴はなさそう。
 - (3)予め現地を土塁状とし、表面に石垣を重ねた「打ち込みハギ」(野づらとする本もある)、土塁側に裏込め石はない。
 - (4)これまでなかったコーナー一部が誕生、角ばった石を積むが「算木積み」はまだない。
 - (5)石垣勾配はおおよそ60度。直線的でそりはない。高石垣を含め「ヒラノスキー」はない。

3) 豊臣秀吉の大坂城 —— 全国経営の拠点、近世平城のはじまり

- ① 天正10年(1582)6月「本能寺の変」の後、山崎の合戦で明智光秀を破った秀吉が天下人に。宝寺城(天王山)から地の利に恵まれた大坂石山本願寺を新居城と定め、天正11年起工、翌12年8月8日に竣工、秀吉が入城。
 - (1)石垣途中の「帯曲輪=武者走り」は長槍対策で当時の流行スタイル。
- ② 縄張りはもと信長の重臣でキリシタン大名の黒田官兵衛(如水)。本丸を中心に2の丸と3の丸を回す輪郭式縄張り。
- ③ 本丸の石垣は水濠を囲むおおよそ15mほどの下の段、おおよそ10mほどの中の段、中央の秀吉が住んだ詰め丸はさらに10mほどの上の段石垣で、角の天守部分はさらに石垣を積み上げた。
 - (1)宿敵豊臣家を滅亡させた家康が徹底破壊、豊臣家の石は地表に1こも存在しない。
- ④ ここには初期望楼型初期天守閣と奥御殿などが置かれた。秀吉は「黄金かぶれ」で、黄金の茶室や金箔瓦、金の家具調度品を飾りたてた。
- ⑤ 豊臣大坂城の特徴は濠が深いこと、石垣の複雑な屈曲と横矢掛かりにある。大坂城は「難攻不落」の名城とされた。しかし、後継を窺う家康は慶長20年の「大坂冬の陣」で、外内濠を埋めて生命線を止め、元和元年再び挙兵した「夏の陣」で落城させた。
 - (1)家康は元和5年直轄城とし、「豊臣城」を地下数メートルに埋没させ、その上に「徳川大坂城」を新築したが慶応4年の鳥羽伏見の戦いで失火焼失。現在の大阪城は昭和5年に再建された鉄筋コンクリート造り。
- ⑥ 現存石垣は石材を瀬戸内小豆島などから運んだ。江戸城を凌ぎわが国の最高レベルの傑作といえる。



- 4) 発見された「豊臣大坂城」中の段、詰め丸石垣 — 「惣構え堀」とその破却
- ① 秀吉の第1期大坂城築城工事の石材は天正11年8月から数か月単位、ごく短期間で集められた。
 - (1) (天正11年8月28日) 羽柴秀吉、大いに摂津大坂に城く、この日前野長泰に石材の採取、運搬に関する条規を付す。(大日本史料⑩=石材の確保や輸送のための掟書)
 - (2) (天正11年11月) ただ今成すところの大坂普請、まず成るところは天守の土台なり」下の段、中の段石垣はこれより早い信長、池田恒興時代に構築されていた可能性が高い。
 - ② 石材調達の大名家や産地は不詳(資料ご存じの方教えてください) 信長同様、近畿地方の諸大名が担当したものといえよう。
 - ③ 石材の輸送は淀川の水利を利用、人足は盛時は10万、石垣は3里8町、石吊り船は日に2百から千艘を数えた。
 - ④ 文禄3年(1594)「惣構え堀」工事。東西、南北およそ2km。当時わが国最大の巨城、天下城。
 - ⑤ 慶長19年、「大坂冬の陣」の和睦条件は本丸以外の堀や石垣を破却すること。「惣構え堀」は徳川方で2、3の丸は豊臣方の手で壊すこととなったが、徳川方は2、3の丸も破却、豊臣方は約束違反として再び掘りかけたことが「大坂城再攻撃」の口実とされた。
 - (1) (慶長20年1月) 大坂の儀、堀埋まり本丸ばかりにて浅ましくなり、見苦しきていにてござ候(金地院崇伝日記)
 - ⑥ 慶長20年5月8日「大坂夏の陣」落城、秀吉築城33年目であった。
 - ⑦ 昭和34年、59年の学術調査で本丸土中から中の段と詰め丸石垣を発見、「豊臣大坂城」の石垣は「徳川大坂城」の再構築によって地中深く埋められていたことが分かった。
 - ⑧ 調査記録写真をみると、「自然石」または「あら割り石」を荒らあらしく積み上げ、詰め石の多い「打ち込みハギ」で、コーナーは大きめの石を左右向後に積み上げている。「算木積み」まで後一步、発展過程。また、表面に落城時に浴びた炎跡が黒々と認められるという。
 - (1) 残念ながら「発掘調査報告書」を入手できず、細かい考察ができませんでした。

5) 最新の築城技術を駆使した戦国期城郭の頂点 — 秀吉小田原石垣山一夜城を築城

- ① 秀吉の「天下普請」のうち小田原石垣山一夜城は歴史的にも有名、かつ当時の遺構が手つかずのまま現存している。関東に所在しているのも嬉しい。
 - (1) 安土城は調査不十分のまま全面的に積み直された。名護屋城はこれから。
 - (2) 天正18年(1590) 天下統一をめざす秀吉は最後まで抵抗する小田原北条氏に20万の大軍をもって包囲して落城させた。決定的勝因は小田原城を眼下に見下ろした総石垣の一夜城の築城にあった。
 - (1) 陣城を越えた本格総石垣の城。秀吉にとって来る「朝鮮出兵」を想定した予行演習でもあった。
 - (3) 4月小田原城包囲、早川沿い石垣山を選び築城開始。5月には石垣もほぼ完成したらしく北政所へ「いしくら出来申し候、やがてひろま、てんしゅたて申すべく候」

- ④ 6月天守閣竣工、塀は白紙を貼って土壁に見せかけ、夜間に周囲の樹木を切り払って一夜城演出。
 - (1) 長引く籠城で士気が落ち「調略戦法」で寝返りも。一夜城の出現で完全に戦意喪失。
 - (2) 7月5日秀吉軍の総攻撃を前に北条氏政、氏直親子が投降、氏政と重臣4人が切腹となった。
- ⑤ 昨年11月定例会で見学 — 井戸曲輪石垣ほぼ完全な姿で現存、本丸石垣などが大部分崩落するも遺構残る。豊臣期石垣の決定版といえる。
- ⑥ 同時に早川石切り丁場も見学した。石垣山城石材供給先の1つとされるが明確でない。
 - (1) 早川は石切り山でなく、加工丁場とする説もある。
- ⑦ 石垣の特徴を考察すると
 - (1) 石材は「あら割り石」で形状がばらばら。
 - (2) 打ち込みハギ(野づらとする本もある) = 不揃いの石積みで詰め石が多い。
 - (3) 石垣の勾配はやや急、75度?、そりはない。
 - (4) 根石や裏ごめ石がない。
 - (5) コーナーはやや角ばった大石だが「算木積み」はまだない。
 - (6) 井戸曲輪は圧巻、「ヒラノスキー」の典型といえる。
 - (7) 本丸西側の急斜面高石垣は途中で帯曲輪を挟んでいる。ヤリが届く距離まで引きつけるため。

⑧ 慶長元年秀吉の伏見城「天下普請」中の大地震でほぼ完成していた石垣が崩壊。重力を分散させるための「扇の勾配(そり)」が考えられ、コーナー部分の「算木積み」が確立することになる。

6) 江戸城と大坂城は石垣の傑作 — 家康の下、花ひらく技術革新

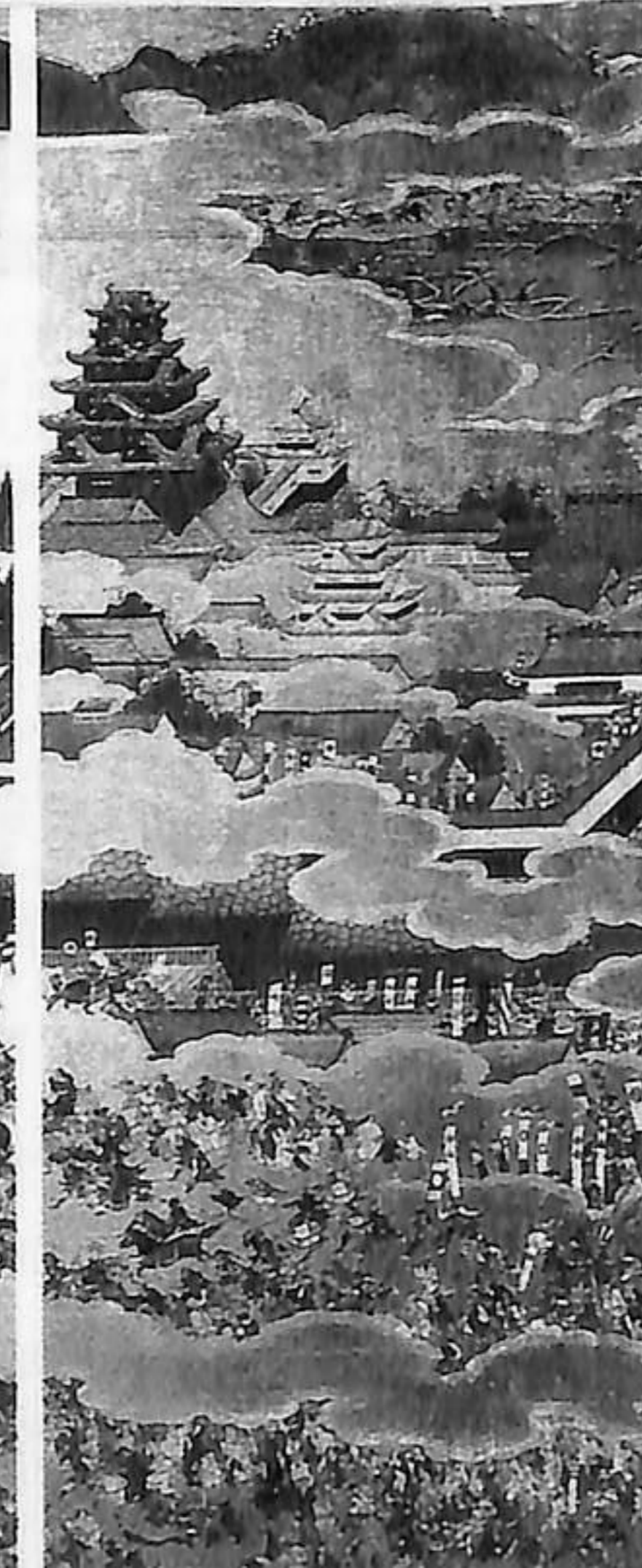
- ① 慶長5年(1600) 関が原の戦いに勝利した家康は、8年江戸幕府を開く。
- ② 家康の「天下普請」江戸築城は慶長9年、慶長13年の2回で、このほか寛永9年など大規模な拡張工事が繰り返された。それぞれが天下普請ともいえる。
- ③ 慶長9年第1期工事で石材調達を命じられた大名は池田輝政、福島正則、加藤清正、毛利秀就、加藤嘉明、蜂須賀家政、細川忠興、黒田長政、浅野幸長、鍋島勝茂、山内一豊など28家
 - (1) 10万石につき100人持ち石1,120こ、合計530万石、59,360こ。用船385艘(東京市史稿) 最終的に江戸城に運ばれた大石は100万こをこえたとみられる
 - (2) 慶長11年黒田長政家の記録=角石(かどいし)12、長さ8尺より7尺の間、幅厚さ3尺。角脇石12、長さ5尺、6尺の内外、幅厚さ3尺、幅は2尺5寸にても苦しからず。
- ④ 大名ごとに「石切り丁場」を作った。
 - (1) 石材調達を命じられた諸大名は独自に「石切り丁場」を確保、緊急命令に備えて製品や半製品を用

第二の城掘りあてる

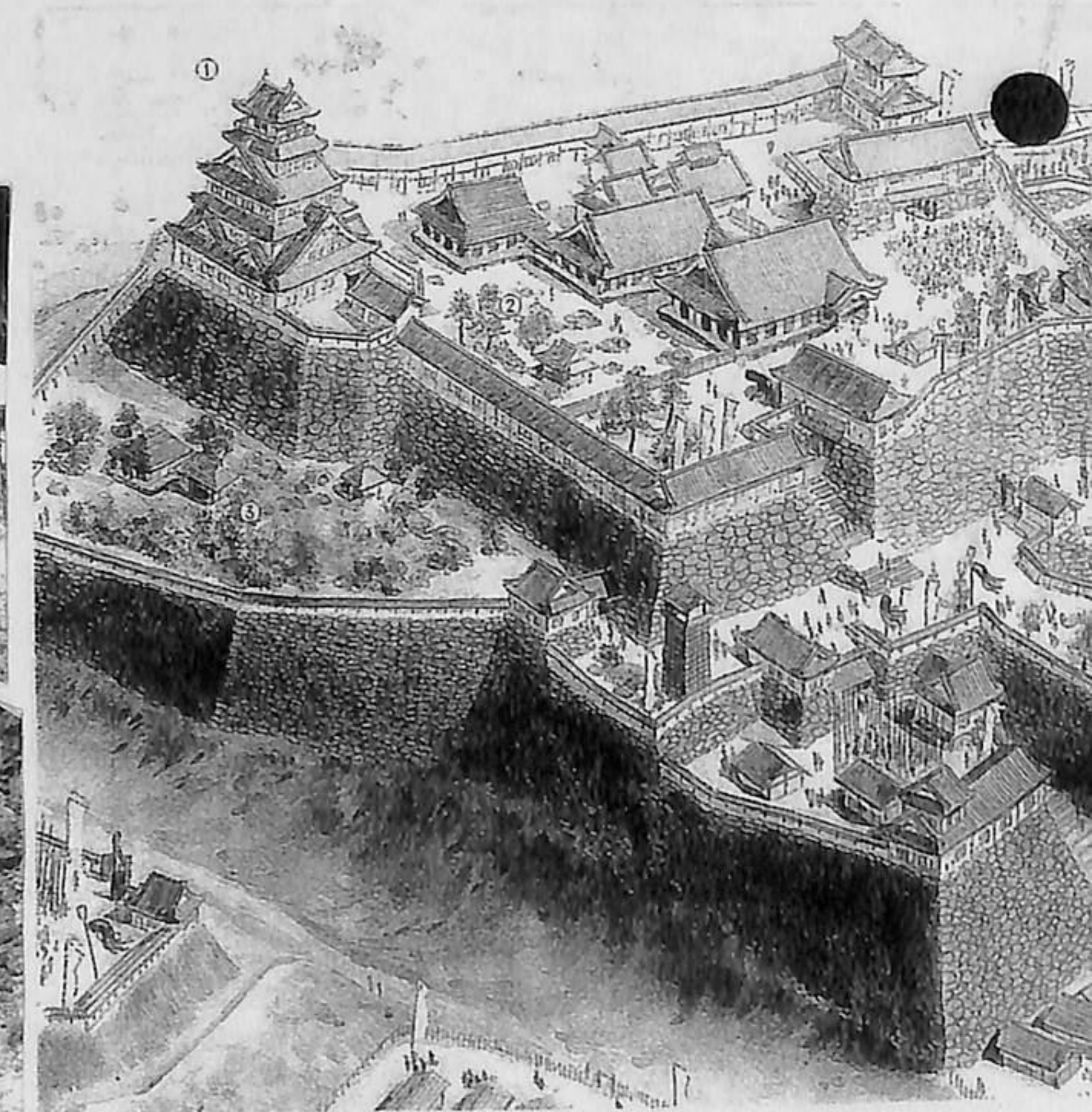
太閤が築いた城が 地下10メートルにナゾの石垣

地下10メートルにナゾの石垣

↑地下で発見された石垣



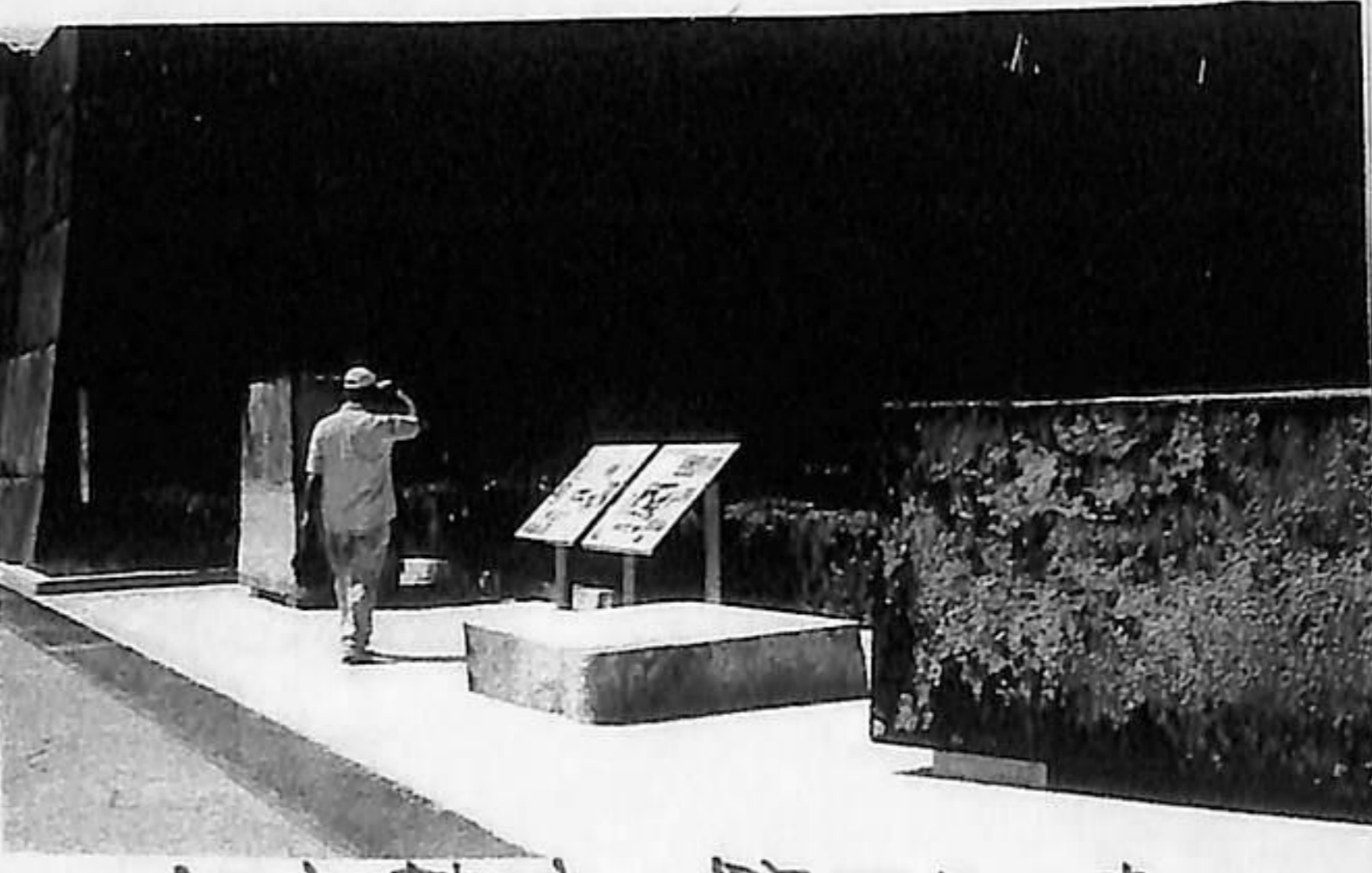
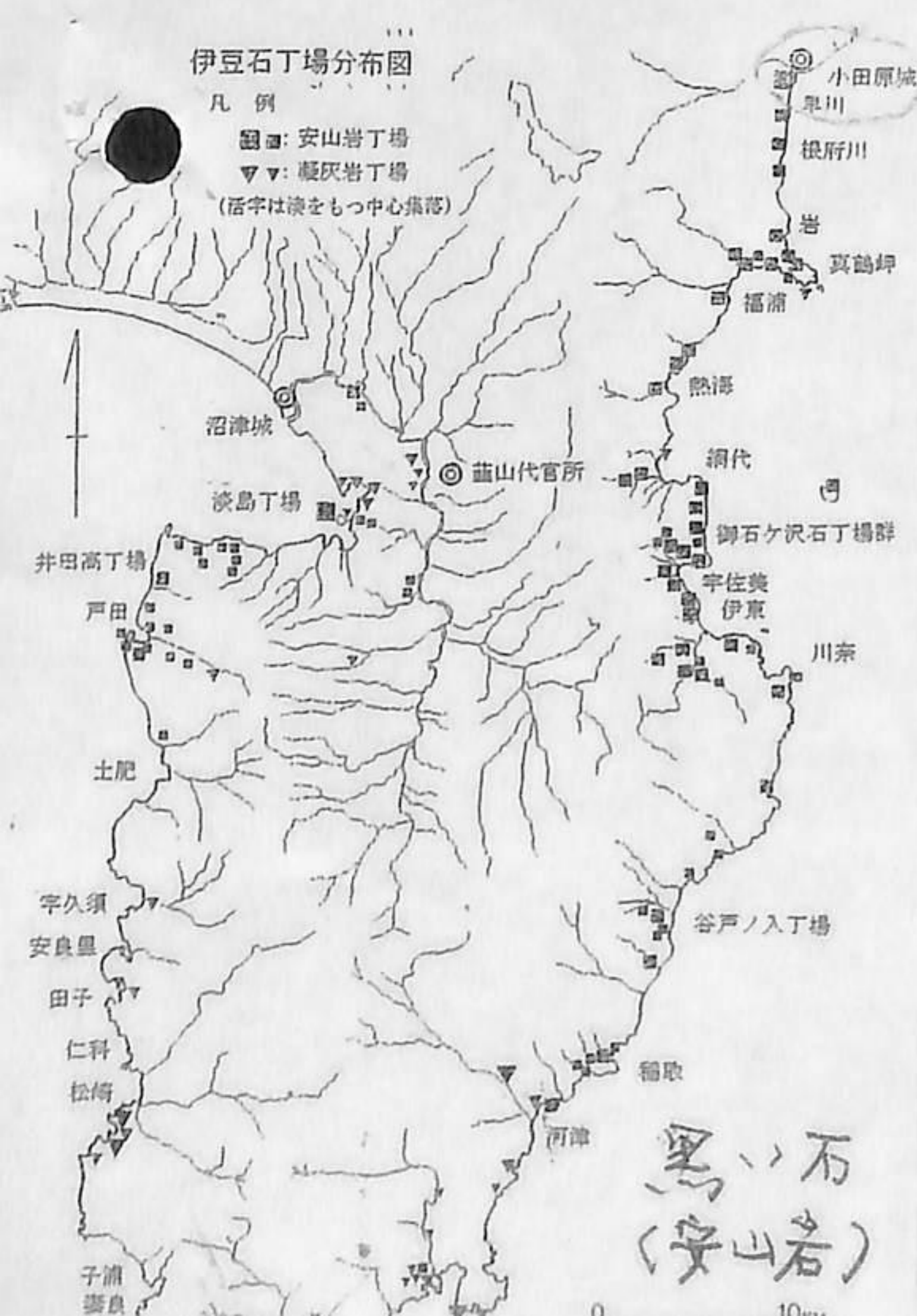
大手造跡



石垣山一夜城

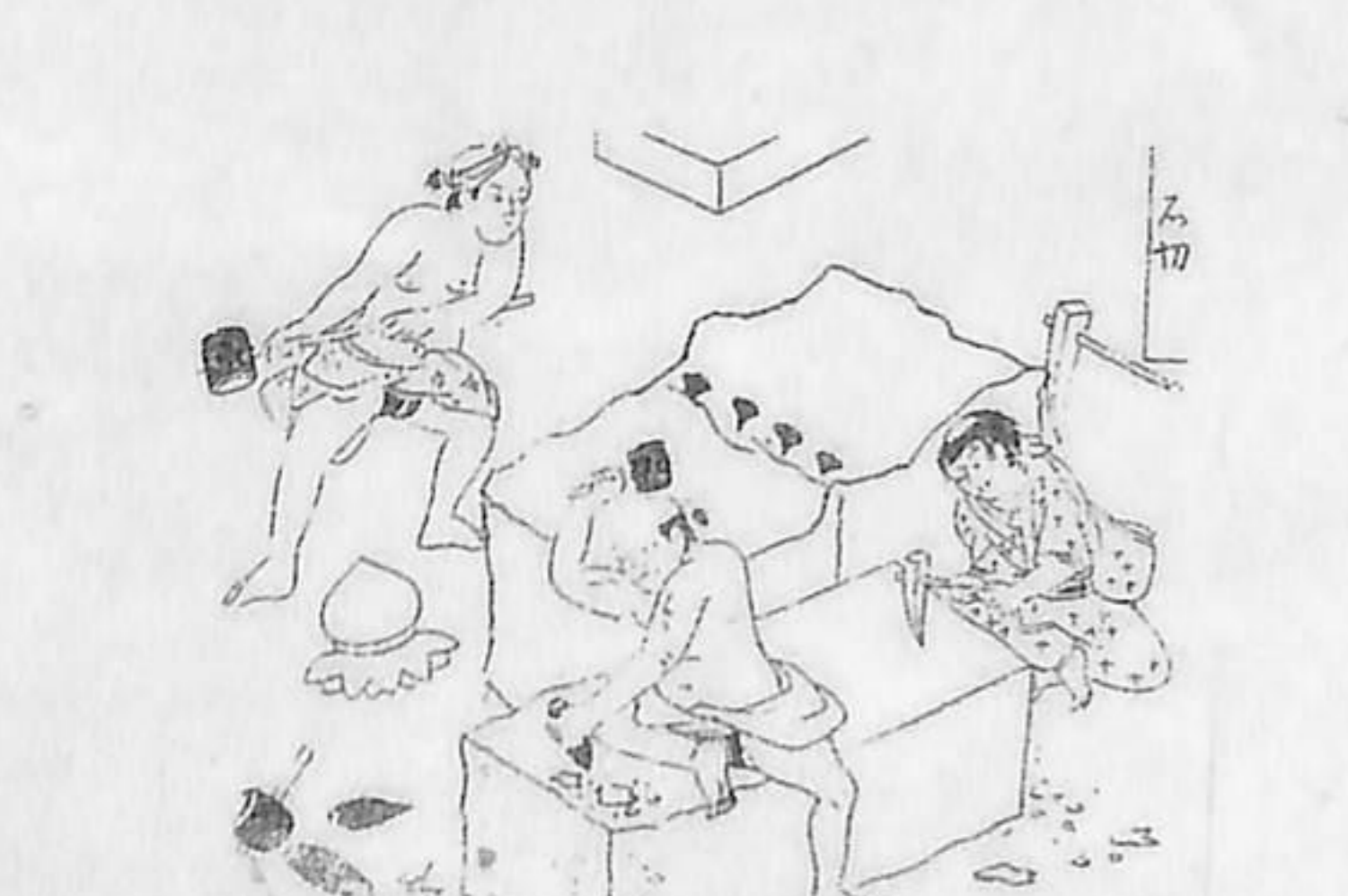
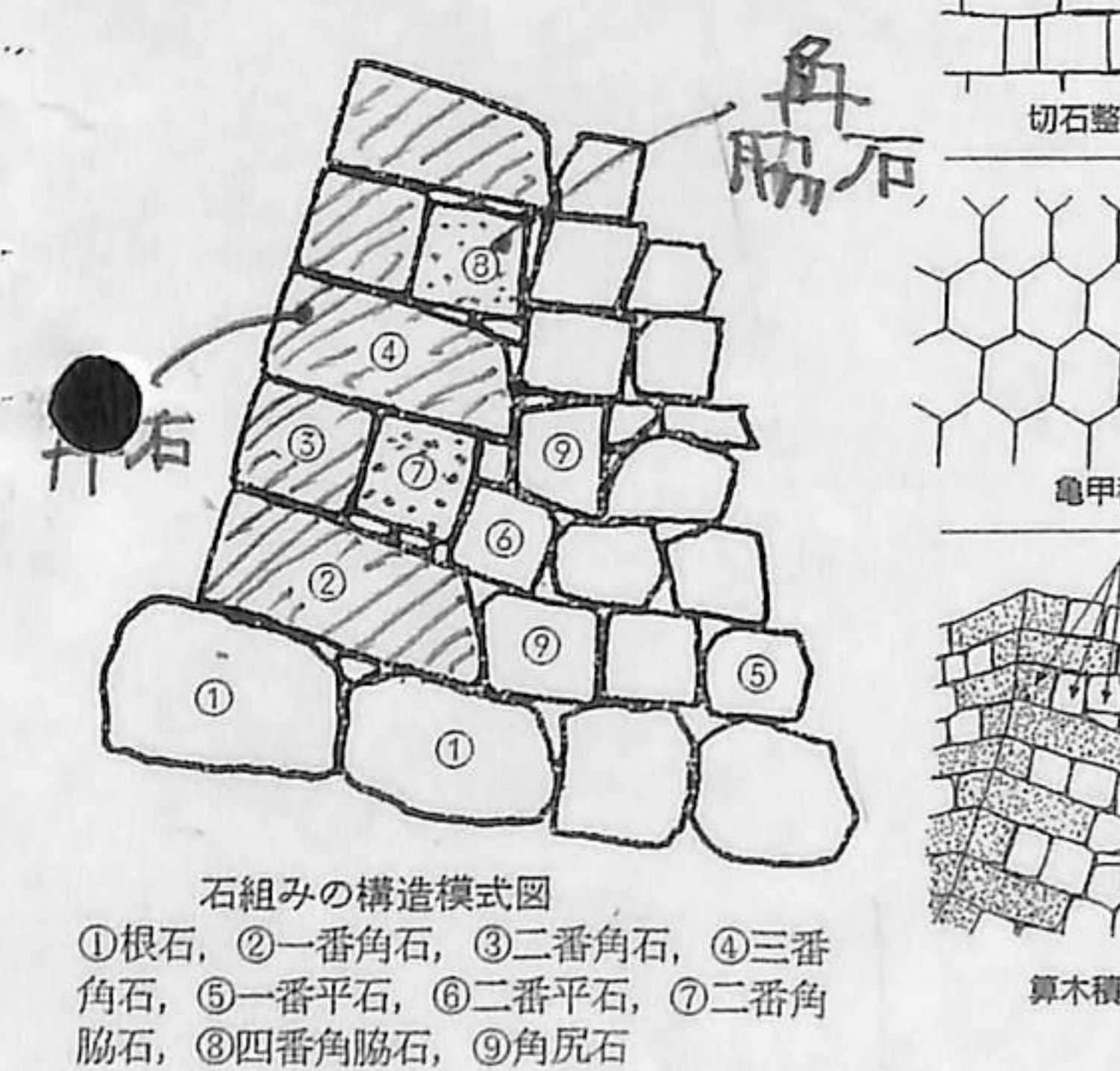
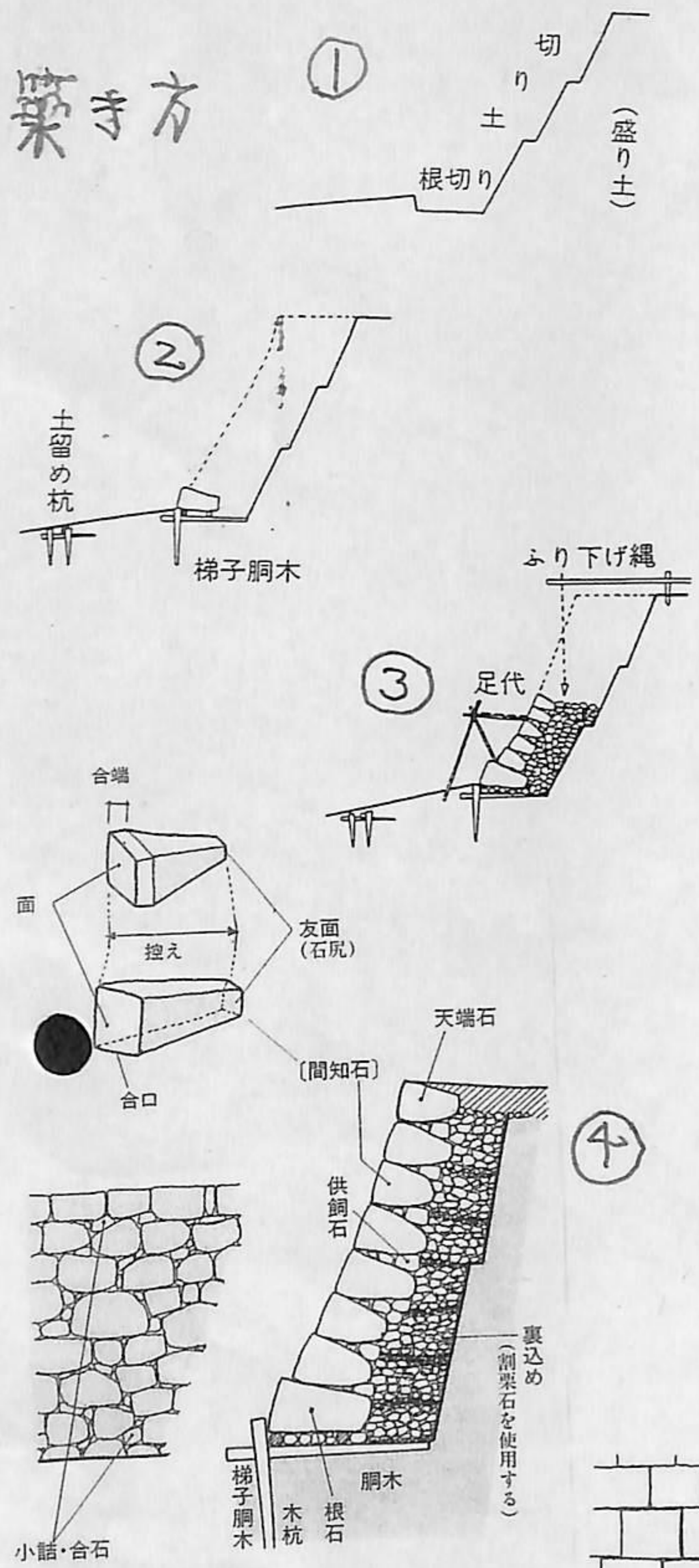
意した。現地に丁場には「丁場預かり」を置き、明治維新まで管理させた。

- (2) 「石切り丁場」は関東は伊豆半島沿岸、関西は瀬戸内小豆島などで、江戸城では黒石が東伊豆の安山岩、後期に使われた白石は小豆島から切り出された。製品は現地加工され、石積み過程での工事時間短縮、省力化が図られた。
- ⑤ 原石は職人が石目を読んで「矢穴」を開け、玄翁で割った。「矢穴」は前期は大きく少なく、後期は小さくて多い。表面の加工状態も年代や担当石工で微妙な変化があった。
 - (1) 担当する大名や作業者が目印のため「刻印」を付けた。「天下普請」以外に刻印はない。
- ⑥ 「あら割り」から「切り石」へ — 形状も変化した
 - (1) 石材ははじめ「あら割り」だが、のちに精密加工して出荷した。
 - (2) コーナー以外の石は先がやや尖った間知石に作った。大量のくず石もすべて運ばれ、かい石や裏ごめ石に使用された。
- ⑦ 「積み出し港」と船積み記録「慶長見聞集」
 - (1) 担当大名は丁場近くの海岸に「積み出し港」を作り、石船で江戸城へ運んだ。港は砂浜を避け、やや急斜面の岩場に海に飛び出して作った。
 - (2) 先年江戸御城石垣をつかさどるるによって伊豆の国にて大石を大船に積むを見しに、海中へ石にて島をつき出し、水底深き岸に舟を付け、陸と舟との間に柱を打ち渡し、舟を動かさず平地のごとく道を作り、石をば台に乗せ、舟の内に巻き車を仕付けて綱を引き、陸にてテコ棒を持って石を押しやり、舟に乗する。船中に巻き車の巧み奇特なり。(慶長見聞集)
- ⑧ 台風で数百艘が沈没 — 東伊豆から海上2日、犠牲も大きかった
 - (1) 輸送は固定した2艘の船のまん中の筏に大石を積み、海中にぶら下げて運んだ。(諸説がある)伊豆から江戸へ海上2日ゆっくり丁寧、天候急変で多くの犠牲者が出た。
 - (2) 慶長10年の黒田家の記録=石船の注文。13艘高原次郎兵衛、95艘蘆屋、25艘大坂、1艘吉川殿、6艘讃岐殿、以上140艘。残して10艘これは2月1日に出るなり。
 - (3) 慶長11年5月25日の台風被害=江戸へ石運送の船数百艘破損、鍋島信濃守120艘、加藤左馬之助46艘、黒田筑州30艘なり。(当代記)
- ⑨ 石積みは諸大名の担当持ち場ごと、技術とスピードを競い合い、築城技術は一気に向上した。
 - (1) 江戸築城の持ち場は大名ごとに断片的に伝えられる。富士見櫓=加藤清正など
 - (2) 参考までに「徳川大坂城持ち場図」を示した。
- ⑩ 石垣勾配=豊臣時代にはじまった「扇の勾配(そり)」が継承される。
- ⑪ 「角石」と「算木組み」も確立 — 江戸城と大坂城はその頂点といえる
 - (1) 石垣の崩壊はコーナー部分の強度不足にあり、慶長以降「角石」の長辺と短辺を交互に組み合わせ、「角脇石」で補強した「算木積み」技術が確立した。
 - (2) 江戸城本丸石垣や西の丸大手口石垣は「2つ石組」(長辺1こに短辺2こ)か2.5組だが、大坂城青屋門脇石垣などに「3つ石組」がある。



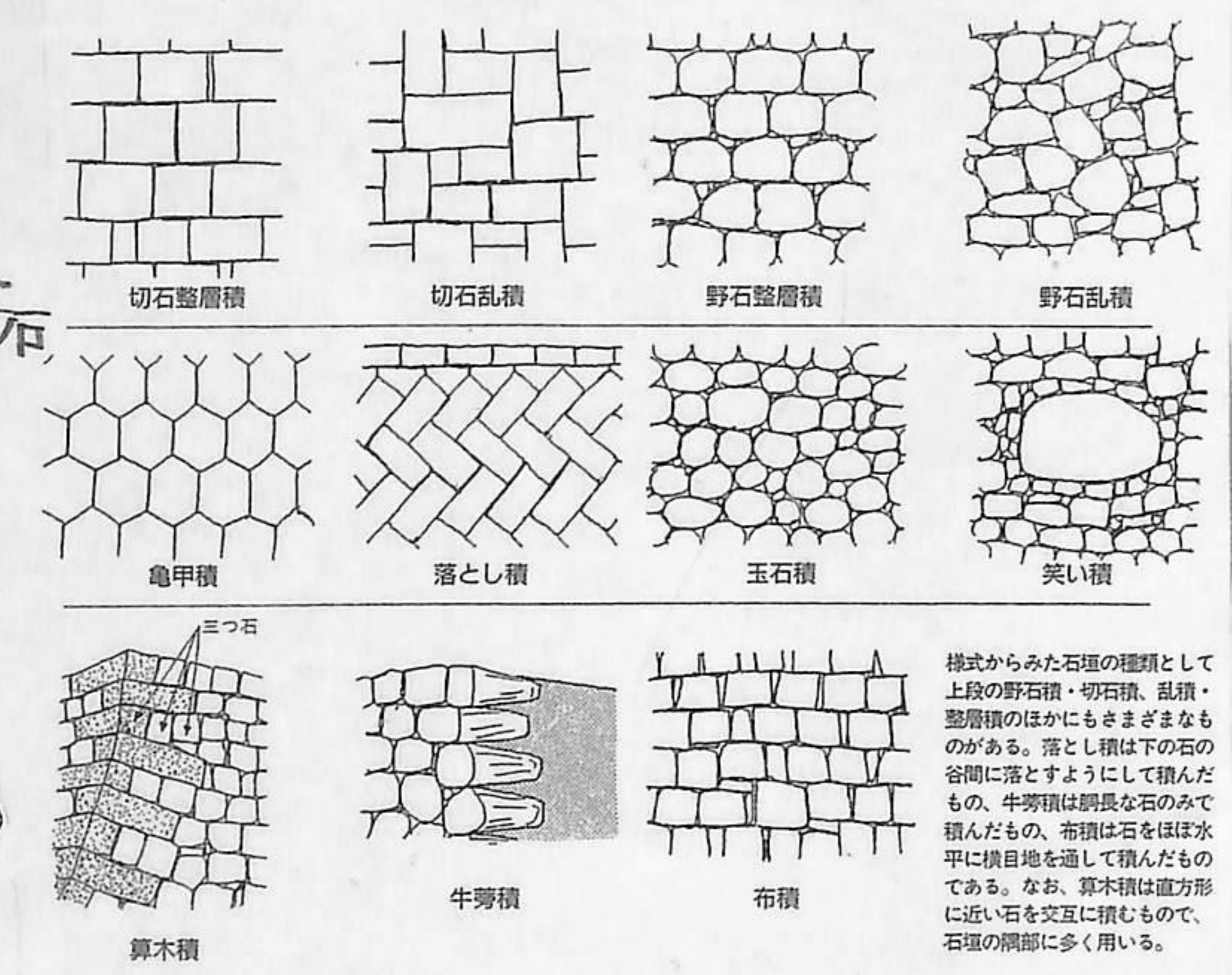
- 7) 藤堂高虎と2人3脚の天下普請
 - ① 家康の「天下普請」の大半は藤堂高虎が担当した。
 - ② 藤堂高虎の略歴=10人の主君に仕えた城作りの名人
 - (1) 弘治2年(1556)近江(滋賀県)藤堂村の郷士の長男に生まれる。
 - (2) はじめ浅井長政に仕え、のち秀吉に従って粉河2万石を領した。
 - (3) 秀吉没後は家康に信任され、関が原の戦いの勝利で今治20万石に進み、慶長13年に伊賀、伊勢20万石に転封した。寛永7年没、75才。津藤堂藩の礎は高虎によって定められた。
 - (4) 高虎は10人の主人を変えたとされ、後世「謀臣」「ごますり」「世渡り大名」の悪名が定着する。「忠臣2君に仕えず」を教える武士道や、鳥羽伏見の戦いで子孫が突然新政府軍に寝返りして、敗走する幕府軍を攻撃したことなどに由来したのではないかと高虎像の見直しが必要。
 - (5) 高虎ははじめ槍働きの武功で名を上げ、のち城作りの名手として徳川幕藩体制の確立に貢献、幾多の名城と日光東照宮縄張りなどの事績を残した。
 - ③ 高虎が築いた「大坂城包圍網」「天下普請」の城=
 - (1) 秀吉の死後、家康側近に転じた高虎は家康の命を受けて次々と大坂城包圍の城を築いた。天下普請の城=慶長6年膳所城、7年伏見城、14年篠山城、15年龜山城
 - 自城の建設=慶長7年今治城、16年伊賀上野城、16年津城
 - ④ その後高虎が築いた「天下普請」の城=
 - (1) 首都としての江戸城建築=慶長11年(9年は関係していない)
 - (2) 直轄城の建築=慶長11年駿府城、元和6年大坂城(二条城は関係していない)
 - (3) 将軍子弟の城の建築=慶長14年名古屋城(徳川義直)
 - ⑤ 高虎はなぜ城作りに長けたか
 - (1) 生まれ育った環境=郷土に石垣技術+建築技術+設計技術があった。石工集団の岩倉(安土城担当)、穴太(聚落第から)、甲良が同郷。
 - (2) 柴田勝家と並んで「信長の両腕」、築城の名手・丹羽長秀に仕え、3男お仙丸を養子にしたこと。長秀の築城=安土城(天下普請)、岐阜城、大垣城、小牧城など。丹羽家は関が原の合戦後改易(後二本松10万石)、丹羽家の築城技術を藤堂家に継承したこと。
 - (2) 家臣、シンパの活用と統率=石積みの穴太、大工の甲良、作事の中井
 - ⑥ 高虎「天下普請」「縄張り」の特徴
 - (1) 平城、単純4角、左右対称の輪郭式で本丸が小さい
 - (2) 水濠が広い(100m)、鉄砲が届かない距離
 - (3) 大手ルートは中央に堂々と。堅固な内升形虎口(高麗門、渡櫓門、大番所)
 - (4) 高石垣(勾配)、土壁しっくい白壁、石垣4隅の櫓と出っ張り櫓台
 - (5) 石積み技術(切り石、切り込みハギ、横目地、水抜き、補助金具)の確立
 - (6) コーナー算木積み(角石、脇石、2つ半組、3つ組)の確立
 - (7) 犬走りの活用と狭間、銃座(弓、鉄砲、隠し狭間)
 - (8) 天端(てんば)石の工夫(土台)などが考えられよう。



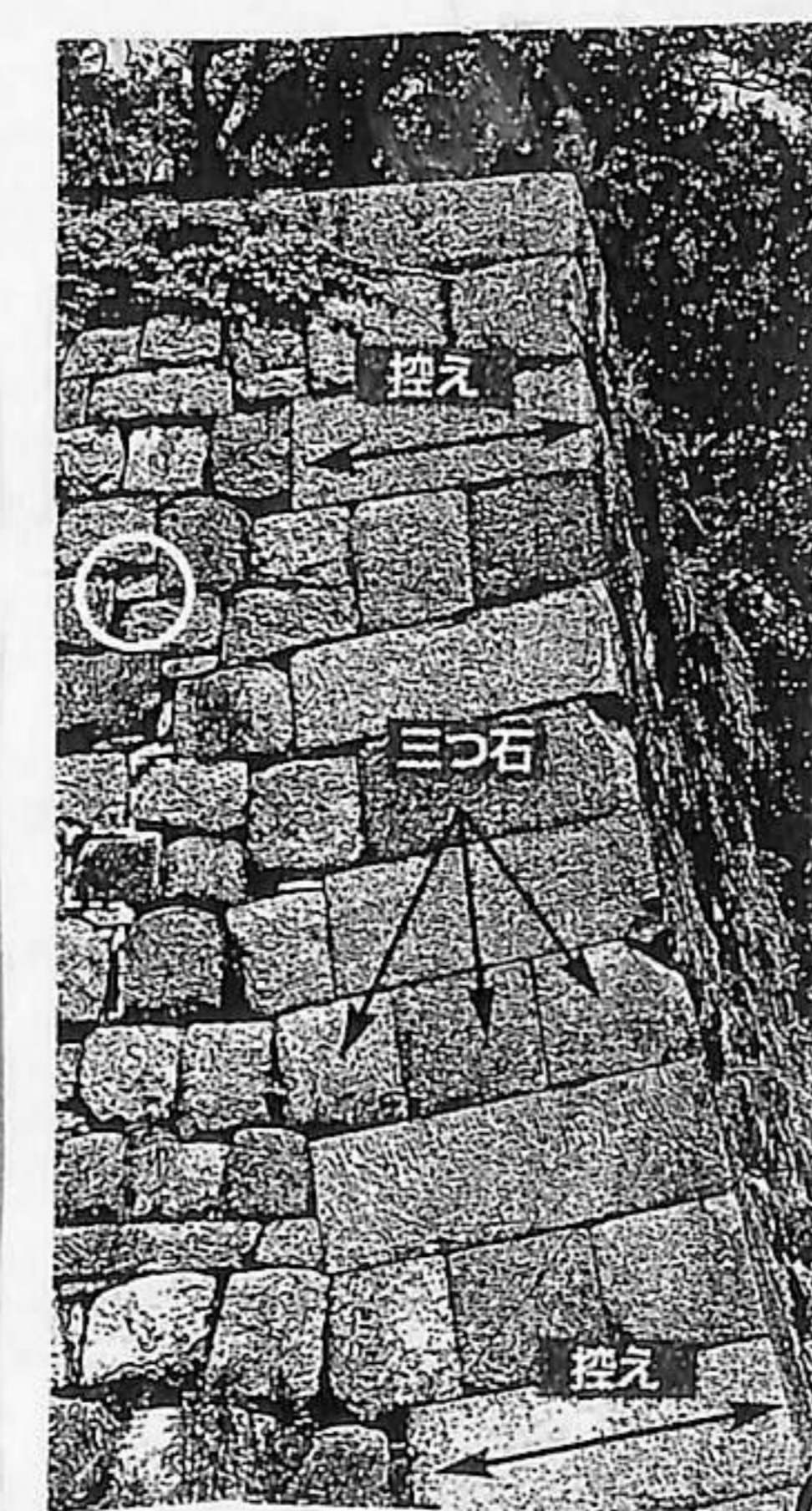


時期	I) 発生期	I) 前期	II) 最盛期	III) 整備期
天正(1572)以前	天正・文禄年間(1573~96)	慶長年間(1596~1615)	元和・寛永年間(1615~44)	
構造	檜台・門など部分的に用いる。石材小さく粗い感じ。	勾配ゆるく直線的。段状の石垣あり。線型系城郭に多い。	石垣のゆがみがまだ見られる。勾配に反りがつく。	急勾配で高石垣もできる。平面直角に、端正な姿に整えることができるようになる。
備考	仮設の掘立て建物から礎石建物へ	天守の形成(初期望楼型)	天守の発達(過渡型)	天守の大型化(後期層塔型)
石垣の種類				
積み方				

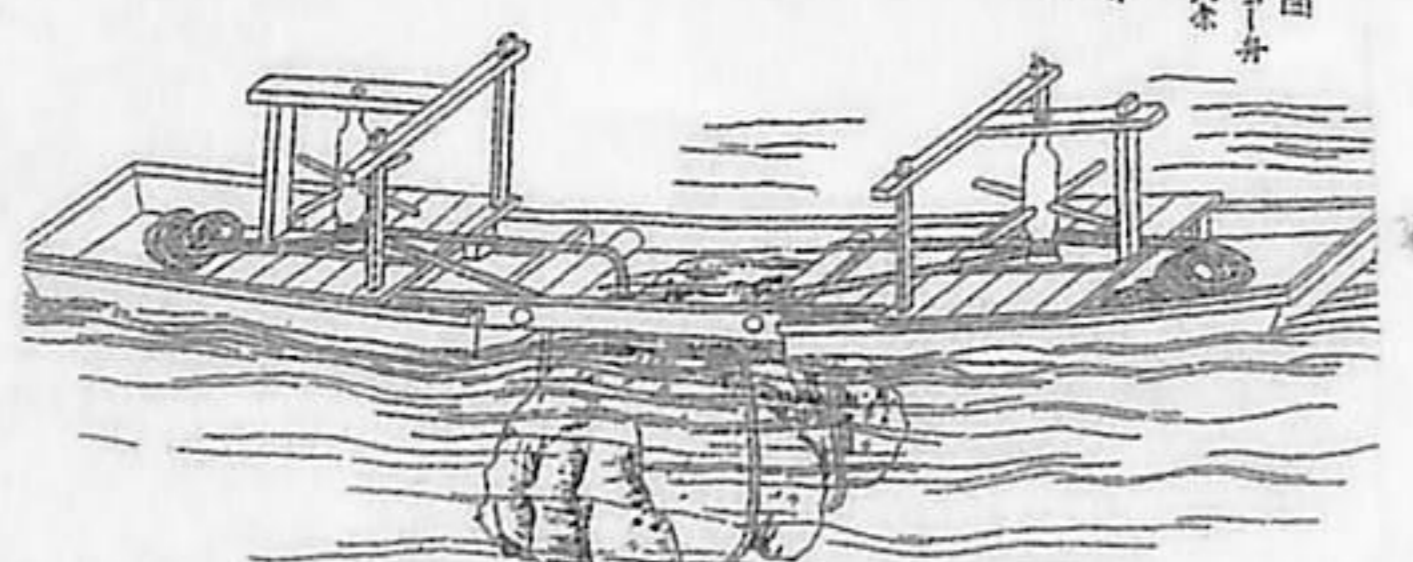
石垣の種類(様式)



様式からみた石垣の種類として上段の野石積・切石積、乱積・整層積のほかにもさまざまなものがある。落とし積は下の石の各間に落とすようにして積んだもの、牛蒡積は脚長な石のみで積んだもの、布積はほぼ水平に積目地を通して積んだものである。なお、算木積は直方形に近い石を交互に積むもので、石垣の隅部に多く用いる。



算木組



「石船の図」(『農具便利論』より)



「加藤清正石引の図」(『尾張名所図会』より)

穴太積み

津市坂本の家々を囲うのは、深緑のユケに覆われた石垣だ。町の隅々まで張り巡らされたさまは、大木の根のようでもある。石を加工せず、そのまま組み合わせる穴太積みは、単純に積み上げられた石の壁のようでありながら、絶妙なバランスで、数百年間、石一つ抜け落ちずその姿を保つことも珍しくない。「崩れそうに崩れないのが、穴太の石積み。200年たつとも作って壊れません」。穏やかに笑う純司の目には職人としての矜持が宿る。

「石の声を聞き、石の心を知り、石の心を己が心として永久に居心地よく居座るよう一つ一つを大事にして据付け」
亡き先代にたたき込まれた言葉は一言一句、忘れるはずもないが、それでも栗田純司(67)は時々、部屋の額に目をやる。「穴太積み」と呼ばれる技法を唯一、現代に受け継ぐ石工集団「穴太衆」の「第13代石匠」だった父、万喜三が書き残した家訓だ。第14代を継いだ純司が、若手の職人に繰り返し聞かせる言葉でもある。

比叡山延暦寺の門前町、大津市坂本の家々を囲うのは、深緑のユケに覆われた石垣だ。町の隅々まで張り巡らされたさまは、大木の根のようでもある。石を加工せず、そのまま組み合わせる穴太積みは、単純に積み上げられた石の壁のようでありながら、絶妙なバランスで、数百年間、石一つ抜け落ちずその姿を保つことも珍しくない。「崩れそうに崩れないのが、穴太の石積み。200年たつとも作って壊れません」。穏やかに笑う純司の目には職人としての矜持が宿る。

石と対話 育む技術



大津市坂本

栗田純司さんの日課は、古い石垣を眺めながら散歩すること。先人の仕事にヒントを得ることも多い

いわれている。しかし、コンクリートの普及などに押され、石工も一人、また一人と減少していった。それだけに、技術継承にかける万喜三の執念は壮絶なものだった。

「石の声を聞き、石の行きたいところへ持っていけ」。万喜三の教えに、純司はとまどった。それまで学んだ土木工学の世界とは正反対に、職人の世界ではマニュアルはなく、図面すらほとんどない。ひたすら万喜三の石積みを見て、技術を盗むしかなかった。

弟子入りして1年ほどたったころ。純司が苦心して積み上げた石垣を見た万喜三は、突然、手にしたボールで石を崩し始めた。純司は思わず叫んでいた。「どこがあかんのや。石がしゃべるわけやな」。説明してくれな、分かんないが。

修業を始めて9年目。安土城の石垣修復現場で、並べられた石材の中に、不思議と目につく石があった。導かれるようにその石を選び、石垣に据えてボールを外すと、「コト」と音がし、実に自然に納まった。31歳にして初めて聞いた「声」だった。

「石だっけ子供と同じで、地味なものもあれば、やんちゃなものもある」。以来、工事に取りかかる前は必ず、2、3日かけて石の「顔」をじっくりと見渡す。「あそこに行きたーい」。そんな声が聞こえるような気がするからだ。

近年は、財政難で自治体の文化財予算が削られるなど、石工にとっては厳しい状況が続くが、伝統の技術を見直す動きもある。4年ほど前に、コンクリートに匹敵する強度が実験で証明され、第二名神高速道路脇の歩道の壁に穴太積みが採用された。「この穴太積みは昔から受け継がれていたとは」。実験を担当していたとは。実験を担当していたとは。実験を担当していたとは。

おとしし、中卒卒業後から万喜三について修業していた長男の純徳(39)が第15代を名乗り始めた。一線は退いたが、純司は今も講演などを忙しかく。気付けば「技術を残したい」という思いは、あの父親以上に強くなっている。講演では必ずこうしめく。「いっぺん、坂本に来て下さい」。

派手なものはないが、それこそ自分たち職人のような飾らないまじ。その静かな魅力が穴太積みと自分育ててくれたまじへの、せめてできる恩返し。そう思いを込めて。

文 滝口亜希
写真 頼光和弘

提供:大高さん